

想像した途端、当然というか、ムスコはびくと一度波打った。

「ん……。なんだ？」

さすがに刹那も顔のすぐそばで揺れたモノに気がついた。恥ずかしさのあまり、直弥は顔に全身の血が集まるのを感じていた。

袴の前は、見事なまでにこんもりとふくらんでいた。

刹那は首を傾げながら、まじまじと袴の出っ張りを見つめる。無遠慮な視線に、さらに一物は硬さを増していった。

「んんんん？ なに？ 生き物のよう……。いったいどうして……」

高校生だというのに、彼女は男の体についての知識を持ち合わせていないらしい。

直弥は、無意識のうちに少女の手を握った。やわらかい小さな手だが、その手のひらの上部分だけは硬い。それは、彼女がずっと刀とともに在ることの証だった。

「……気になるなら、触ってみる？」

速く激しく波打つ心臓の音が、手を通して伝わってしまうかもとひやひやしながらも、思いきって直弥は彼女の手を袴の隙間から自らの熱い肉棒に誘導した。純真な少女を騙すようだが、もう我慢できなかった。

「……………っ!？」

刹那の指が、トランクス越しにはあるが、硬さに触れる。彼女はひととき大きく目を見開いた。

初めて触れる男の化身だった。

刹那の胸がどきんと波打った。たちまち顔が真っ赤に染まる。

硬くて熱く、そして太い血管が手の下で力強い鼓動を奏でている。

「あ……」

唇から、かすかな声^とが吐息^{いき}と同時にもれでた。刹那の思考回路は激しく乱れていた。

そこは、なにかを切実に求めているようにぴくぴくと反応している。

そして、その求めているなにかを刹那の本能はわかつていた。

そのあまりにも雄々しい屹立に刹那は本能的に怯^{おび}えて、手をいったん離そうとする。しかし、手を離さなければという意味に反して、手は吸いついてしまったように直

弥から離れようとしなない。

むしろ、無意識のうちに刹那は手を握りしめていた。

すると、そこはさらに硬度と体積を増していく。

（これは、いったい……。どうして、生き物のように動くのだ……）

小さな手にはちきれんばかりの肉竿を感じながら刹那は思った。

（私にはこんなものはない。こ、これが殿方の……なのか）

改めてそう認識すると、刹那の身体中から汗がどっと噴きでる。

いくら刹那が性について詳しくはないとはいえ、男女の違い、自分が今握っているものがなんであるかくらいは見当がつく。

「あ、あああつ……」

今、自分はまぎれもなく男性の性器に触れているのだ。なんて恥ずかしい、はしたないと思うと全身が震えてくる。

そう思う一方で、刹那は自分の身体の変化に戸惑っていた。

下腹部が熱く疼き、侍女は無意識のうちに内腿を閉じた。じゅんと甘い蜜が一滴、襷の奥から溢れでてくる。

「や、ああ……」

妙な感覚だった。膣の奥深くがなにかを求めてひくついている。

そんな感覚を否定するかのようには、刹那は弱々しくかぶりを振った。

だが、刹那の身体は熱く火照^{ほて}る一方だ。

はあはあとかすかに喘ぐ刹那の様子を見ると、直弥はさらに勇気を奮いたてて、彼女の手をトランクスの下へと導いた。



刹那がびくりと反応する。手が男のシンボルに直接触れた。

「あ、はあ……っ。熱……い」

うわごとのように刹那はつぶやいた。

彼女の手に触れた肉竿は、すべすべとしていた。やわらかできめ細かい皮膚に覆われたその部分は、やはり硬くて熱を帯びている。そそり立った肉棒を取り巻く太い血管の雄々しい脈動が、先ほどよりダイレクトに刹那の手から伝わる。

「あう、はあ、はあはあ……や、やああ……」

女っぽい艶めいた声が思わずもれてしまう。

刹那の目の前はぼうっとかすみ、意識が遠のきそうになる。

「……もつと、こう、ほら……」

直弥は刹那が呆然としているのをいいことに、少女の手のひらで亀頭の先端をくすぐってみた。

「あ、濡れて!?……」

先走りの液が刹那の手を濡らした。粘液の感触に、刹那は驚いて手を離した。

しかし、直弥がその手に再び握らせる。

すると、刹那の頭の芯は痺れ、抵抗しようとする気はたちまちのうちに失せた。少

女の手をカウパー液が汚してゆく。

その潤滑油にたつぷりとまみれた刹那の手のひらを円を描くように動かしながら、直弥は自分が一番感じる先端を中心に、粘液を塗りひろげていく。

刹那はぼうつとなつてしまい、直弥の手に誘導されるがままだった。

「あ……いい。いいよ……」

直弥が顔を上気させ、荒い息を吐きながらそう言った途端、初めて刹那は理性を取り戻した。

はっと気がつくのと、あわてて手を離す。

「……き、きき、貴様！ い、いったい私になにをさせようとっ」

さつきまで直弥の肉棒を握っていた手を、もう片方の手でかばいながら、刹那は直弥をにらみつけて叫んだ。全身を激しく震わせている。

「いや、そ、その。ご、ごめん。だって、珍しそうにしていたから、つい……」

「も、問答無用！ 汚らしいことこのうえないっ」

刹那は大きく手を振りかぶると、容赦なく直弥にきつい一撃を見舞った。

ぱしんつという音とともに直弥の頬に激痛が走る。一瞬、視界には星が飛び散った。

「親にも叩かれたことないのに……。い、一度言ってみたかったんだよな」